十月十日ＩＮ異世界

椛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十月十日ＩＮ異世界

【Ｎコード】

Ｎ９６２４Ｙ

【作者名】

椛

【あらすじ】

このお話は、異世界に迷い込んだ少女が、歳の差・体格差のある旦那様へ嫁ぎ、全ての人に勘違いされながらも楽しくマイライフを生きるという、作者のとある日に浮かんだ妄想・空想を元に執筆されております。

一話

「こわい、こわいの……」

怯えたように後ずさるあたしを見て、痛ましげにその瞳を伏せる男とメイド多数。

「……リリィ、すまない。にをはこびだせっ」

小さく謝罪を口にした男は、それでもこれ以上の逃亡生活を許す気はないらしい。

一言命じられて、壁際に控え顔を伏せていたメイドや使用人たちは、火急的速やかにあたしの小さな隠れ家から少ない荷物をさらに小さくして広げられた大きな布に包み運び出す。

「……こ、わい」

そう呟きながら、あぁ……これであたしの心穏やかだった日々も終わりか、と諦めの籠った何ともやるせない気持ちのまま思い返せば、本当にあたしの人生は波乱万丈だな。

―――始まりは三年前、何が原因かなんてことはいまだに解明に到っていないけれど……あたしは異世界へと迷い込んだ。気が付けば見知らぬ路地裏にいて、言葉も通じず、何より生き物のサイズが大違いも良い所だった。人……なのだ。それは間違いないと思う。でも、これは無いだろう？と顔も知らぬ神に問いかけたくなるほど、彼らは大きかった。どんなに背伸びをしても、あたしの身長はこの世界の平均の人間の腰くらいしかない。話しかけようにも彼

らの言葉はまるで、そう……例えるならノイズの様にざらざらと耳障りな音でしかなく。

何度泣いただろう、何度声を嗄らしたか覚えてもいない。……十五の秋、あたしは世界を超えた。

それから半年もの間路地裏を彷徨い、結果生きるためゴミも漁ったし、お風呂なんて夢の中でしか堪能できない日々を送り、立派なホームレス……と言えば聞こえは可愛いけれど、そう、小汚い浮浪者へと成り果てたのである。

そして今から二年と半年前、あの日、あたしはその小ささゆえか幼い顔立ちが目に留まったのかは分からないけれど、半年もの間小汚い孤児としか見られていなかったはずが奴隷商人へと捕まり、目隠しと手かせをされて乱暴にどこかへ連れ去られた挙句、数週間もの間、陽の入らないじめじめした場所へと閉じ込められた。

ぴちゃん……と、どこかから響く水の滴る音。地面に転がされ目隠し状態のまま、どれほどの時間が経過したのか。容赦なく縛られたままの手足は血が通っていないのか、感覚もない。本当に、死にたいと思った。ここへ迷い込んで、何度も帰りたいと泣いたけれど、所詮異世界なのだ。あたしがどれほど泣こうが、気にする者は一人もいない。心配してくれる母も父も兄も弟もペットの犬も……親友も。あたしの嘆きも悲しみも、届きはしない。……だから、もういっそ死んでしまえば、そう、考えてしまうほどには、心も体も、疲れていたのだ。

けれどあの時、目隠しの布の端に光が差し込んだのだ。ゆらゆらと揺れる蝋燭の光。奴隷商が来たのかと身体を強張らせたあたしの耳元で、突然、あのノイズのような聞き取れない音が響き、お恥ず

かしながらも人生で初、極度の疲労ととてつもない恐怖により気を失った。

そして目を覚ませば、これまた見知らぬ男の家で、それもふかふかの柔らか高級ベットへ寝かされていて。ふぇ？って飛び起きましたよ、そりゃね。でもまぁ、悪いようにはされず保護されたらしいことを、言葉は通じなくとも感じ取ったあたしは大人しく療養した。だって、言葉が通じない以上いつなんどき放り出されるか分かったもんじゃないでしょ？だから出された食事はそれこそお腹が裂けるんじゃないかってくらいパンパンになるまで食べて、お風呂だって日本にいた頃はいつでも入れたからそこまで真剣に入浴した事もなかったけど、肌が紅くなるくらいごしごし擦って温かなお湯にものぼせるほどじっくりと浸かって今の幸せを堪能していた。

そして、何よりもこの穏やかな生活の中で一番助かったのは言語教育！！二年半経ってもまだ子供の様にひらがな言葉しか喋れないけど、それでも簡単な単語なら理解できる。初めて理解できたとき、感動して泣いてしまったほど。他人と意思疎通が出来ると言うのは、本当に人間には必要不可欠で、心身共に安心感を与えるものだなぁなんて実感できた出来事だった。

――――そして、やっと幸せになれたはずのあたしが、今現在何故怯えているのか……。

それは、いくら簡単な言葉がわかるようになったと言ってもそれは所詮ひらがな単語。難しい単語や言葉、会話など高レベルなことなど無理だってのに……勝手に勘違いしたこちらの世界での保護者によって、大恥をかかされ、それによって湧き出したとてつもない羞恥と怒りが噴火して、あたしが家出。まぁ、結局は隠れ家も見つかってしまい今連れ戻されているわけだけど、でも元々悪いのはあの人なんだから！！……あぁもうっ！思い出すだけでも恥ずかしす

ぎて泣きたくなるっつーの！！

二話

＊＊＊＊＊ドーラ・キルシュ・ノールブルク

「……すまない、リリィ。荷を運び出せっ」

怯え、後ずさる黒髪の女性……。一見した者にはその幼い容姿から彼女が実は成人していて、しかも既婚者だとは信じられまい。そう……世界でも貴重な、黒を身に宿す彼女は、

「ノールブルグ副団長、失礼なことをお聞きしますが……」

その時、儂の部下で医療術者のナーズが聞きずらそうに瞳を伏せて問いかけてきた。

「構わん、続けろ」

「……奥方はなぜ、夫である副団長を見てなお、あのように怯えられていらっしゃるので御座いましょう？」

……そんなことは、儂が聞きたい。リリィは、二年半前に奴隷商の穴倉を一斉包囲し摘発した際に初めて出会った。彼女は奴隷商に捕まり、長い間牢に転がされていたらしく衰弱も激しかったようで、初め王国医術院で保護されるはずが、なぜか彼女を助け抱き上げたままだった儂の服を握りしめて離さなかったため……儂の屋敷へと運び込まれた。そして定期的に王国お墨付きの医療術者が屋敷へと彼女の様子を診に足を運んでいたのだが、その容姿から以前の大戦で被害にあい絶滅したと噂されていた国境に集落を置く少数民族…

…黒の一族の生き残りだろうと断定され、以来王国保護指定され、国より多大な援助を受けている。

心身の疲労により深い眠りについていた彼女が目を覚ましたその時、儂等は一族の絶滅から数年の時をどう生きていたのか、少しずつでも何かを聞ければと思っていた。しかし、目が覚めた彼女は言葉を無くし、ただ身体を生かすと言う意味でだけ食事をし、風呂へ入り、深く眠った。

儂は、王宮騎士団副団長と言う重責故日々忙しく、彼女に目を向ける時間を取ろうともせずに半年が過ぎた。そして半年経ち仕事もやっと落ち着いてきた冬頃の事だったか。彼女の世話を任せていたはずのメイドたちから、彼女は保護されてから一度も笑顔を見せないのだと相談を受け。その相談をふむふむ、と大人しく聞いていた儂は最終的に何がいけなかったのか……旦那様は一度も見舞いにすら訪れずお可哀想だとはお思いになられぬのですかっ？！これではまだ年若い彼女があまりにも不憫すぎます！！と抗議まがいの説教まで受けてしまった。

……そうだ、それで儂は彼女の部屋まで出向き、何の反応も示さない彼女の能面のような表情を前に語りかけ続けた。時には幼児用の絵本を読み聞かせ、時には儂の若い頃の失敗談を、そして、いかにメイドたちが彼女を心配しているのか。そうして二月（ふたつき）が過ぎ、半年が過ぎ、一年が過ぎた頃……話す事が出来なかった彼女が少しずつ変わっていった。可愛らしく微笑むようになり、二人、馬で遠乗りにも出かけるまでに回復し、自然彼女との距離は縮まり、儂はこの年になって初めて宝石店で女性物の小さな指輪を買った。そして、結果……年甲斐もなく婚姻まで至ったと言うわけだ。

まぁ、リリィは儂の腰ほどしか身長もなく、夫婦として見られる

こともなかなか難しいが、今となっては惚気る良い話のネタだ。

「リリィ、いったい何があったと言うのだ。どうして勝手に屋敷を出て行った？」

震え、壁際のベットの端まで後退り顔を伏せた彼女の傍へ膝をつき、優しく声をかける。

「こ、わい……いや」

未だ片言の単語しか口にすることが出来ない彼女は、小さな赤い唇を震わせて、小鳥のようにか細い声で何かに怯えているのだと儂へ告げた。

「怖い、か。ふむ……リリィ、わしはだれだ？」

彼女が屋敷を飛び出す前は、言葉遊びの様に良く口にしたものだ。

「わ、しは、だれ？わ、しは、りりぃのすきなひと」

たどたどしく、あの頃の様に言葉をなぞり問いを返す彼女に、安心するよう大げさに微笑み

「そうだ！儂はリリィの好いた男だ。儂ほど強い男はどこを探そうともそうはおらんぞ？何を不安がるのだ？」

「す、きな……ひと」

リリィは儂の張られた声にびくり、と顔を上げ、そして甘い声で儂を見つめそう言葉を零した。

「帰ろう、儂等の家へ」

「い、え……にっ？」

彼女が答えを出す前に、ころりころりと言葉を舌の上で転がしている様子を見て、儂は彼女を大きなシーツに包み抱き上げた。

「ナーズ、すまないが後は頼む」

「……今日付き合わされた全員を後日酒場へ連れて行くとお約束頂けるのなら」

「……ふんっ」

しっかりしとるわい。まぁ、行方不明になった少数民族の生き残り、しかも王宮騎士団副団長の奥方の肩書を持つリリィを捜索すると言う大義名分を掲げていても最終的は夫婦喧嘩に巻き込まれたような形になってしまったしな。部下に奢るのも上官の務めだ、致し方ないとするか。

三話

「リリィ、いったい何があったと言うのだ。どうして勝手に屋敷を出て行った？」

あたしが怒りに震え、それ以上近づくなオーラを放っても……この人に通用しないのはもう二年以上一緒に暮らしてようく！理解してはいるけどもっ！！

「こ、わい……いや」

まぁ、怒っているあたしを宥める為にベットの端に膝をついたまでは良い手だと思うわ。そんな風に優しくされて悪い気分になる女性はなかなかいないでしょうし。でもこの人は、あたしが難しい話し言葉を苦手としていることを知っているはずなのに……なぜ早口で語りかけるの？名前を呼ばれたのは聞き取れたけど、そのあとなんて言ってたのか全然理解できないっつーの！！

……一応、今の会話成立してませんよ？と気づいて貰う為に「早口で怖いんですけど！」とこちらの言葉に置き換えて口にしてみたものの。

「怖い、か。ふむ……リリィ、わしはだれだ？」

あぁ、そうですよね？……全然通じてさえいないらしい。あげく、お屋敷で言葉の勉強の為に良くこの人に出されていた問題をこの場にて披露されてしまった……騎士さんやメイドさんの沢山いる狭い部屋の中で。十八にもなってこんな幼稚な言葉遊びしていたのが、公の場で暴露されてしまった！！

なんて恥ずかしい……しかし、この問題に答えないことで更なる羞恥にさらされるのはもう勘弁なので

「わ、しは、だれ？わ、しは、りりぃのすきなひと」

……えぇ、分かっていますとも！！公衆の面前で告白して、お前は十八にもなって恥ずかしくないのかって？！うぅぅ、恥ずかしいですともっ！！けどそれもこれも、これ以上の恥をかかないため！！一時の恥はかき捨てます！！

「そうだ！儂はリリィの好いた男だ。儂ほど強い男はどこを探そうともそうはおらんぞ？何を不安がるのだ？」

もうやめてっ！！そう叫べたらどんなに救われるだろう……。奥手代表である生粋の日本人としては、この世界の大っぴらな愛とスキンシップに耐えうる心も体も持ち合わせちゃいないんですよぅ！！

「す、きな……ひと」

嫌いじゃないですよ？本当はとても「すきなひと」だけれど！！今現在あなたのもっとも大事な人は？とか問われれば……今となっては瞳を閉じても瞼の裏に浮かび上がる最愛の夫、だけど！！でもやっぱり恥ずかしいものは恥ずかしいんです！！

「帰ろう、儂等の家へ」

えぇっ、もう「いえに」帰るんですか？でもまだ貴方にかかされた大恥について、どうやって仕返しするか考えていないんですけどっ？！

「い、え……にっ？」

なんて、言葉が分からない分心の中でたくさん返事を返している間に……気が付けばさわり心地の良い真っ白シーツに包まれて、愛する夫の分厚い胸板と太い腕に抱き上げられ、帰途に着いておりましたとさ。

そして数週間ぶりに帰った我が家では、あたし付きのメイドや執事さん、料理人の皆さんに散々叱られて甘やかされるのです。

四話

＊＊＊＊＊ドーラ・キルシュ・ノールブルク視点

「荷は全て積み終えたか？」

愛妻であるリリィをその腕にしっかりと抱き、彼女が隠れ住んでいた小さな木造の家を出た。そして周囲を見渡せばすでに人だかりが……。

そうだ、ここは儂等の屋敷がある貴族層の土地ではないと言うのに、突然このような平民層の家々が立ち並ぶ土地に騎士やメイドが駆けつけ、この家がある道の先、大通りには我がノールブルグ家の印が焼かれた馬車まで止まっているとあって噂付きの人々が集まり始めていた。

「荷は積み終えましたが、この人の多さでは……馬車へたどり着くにも一苦労です」

本来ならば、リリィの顔を見られぬよう家のドア前に馬車をつけ、素早く乗り込み帰途に着く予定だったのだが。この辺は狭く、馬車がこちらまで入ってこられぬため、自分の足で人だかりをかき分け歩くしかない。

「全くだ、まぁ良い。リリィは小さいからの、こうしてシーツに包まり儂のような巨体が抱き上げれば顔など見えやせんだろう」

部下たちよりも頭一つ高い所から、儂はそう告げ足を踏み出した。

ざっざっ、と儂を囲むように配置につく部下とメイドたち。

「ご主人様、奥方様のご様子は……」

歩き出す儂の背後から問うその声は、リリィへ付けたメイドの一人……名はユーユと言ったか。

「今は眠っているようだ。きっと、疲れているのだろう……」

ちらりと白いシーツの隙間から見える美しい黒髪は、すぅすぅと規則正しく上下している。その穏やかな呼吸を腕に感じ、あぁ、先ほどの怯えは儂へ向けられていたわけではないのだと、ほっと胸を撫で下ろす。

そしてふ、と考えてしまう……。もし、万が一彼女が儂を恐れ、あの美しい漆黒の瞳から涙を流すようなことがあれば……と、己のもっとも恐れる妄想へ取りつかれかけたその時

「ドーラ様、御足もとにお気を付け下さりませ」

ノールブルグ家の執事長であるジャオが深みのある低い声でそっと注意を呼びかけ、はっと俯き気味であった顔を上げれば……目の前には見慣れた我が家の印が焼かれた馬車が。

「……あぁ、少し、物思いに耽りすぎたようだな」

儂の腕の中、身動き一つせずに眠り続けるリリィを見つめ……。つい三年前の儂であれば、五十を過ぎてなお鍛錬や戦しか知らぬ自分が、まさかこの先、こんなにも心揺れる相手に出会うなど、妻として迎え入れるなど、考えも及ばなかったであろう……と思い返す。婚姻が決まった頃は年老いた初老の男が今更、と噂され、酷い言葉を投げつけられたことも一度や二度ではない。それでも儂は、一度この腕に抱き恋した愛しい女性(ひと)を手放すことが出来ず……恥も外聞

も投げ捨て、やっと手に入れた妻を失う恐怖に、こんなにも動揺し怯える夫を知ったなら、リリィは何を思うのだろう？

「皆、今日は良く働いてくれた。後日浴びるほどの酒を贈らせてもらおう」

腕には愛する人を抱き、そんなことを考えているとは考えもつきもしないだろう部下へそう告げ、儂は馬車へと乗り込んだ。

――――――がたん、ごとん、がたん、ごとん

屋敷へと走り出した馬車の御者台には執事のジャオと御者兼馬小屋世話人のリャク。馬車内部には、儂とリリィ、そしてリリィ付きメイドのユーユとメイド長のマリアンが同席している。

「ご主人様、このような場で差し出がましいことを申しますが……奥方様は、やはり例の件が御嫌でいらしたのでは」

数分か、数十分か、誰も口を利かず、深々と静まり返っていた室内に、彼女には似合わぬ弱弱しい小声でそう進言したのは……メイド長であるマリアンであった。

「マリー様……そのようなこと」

マリアンのその一言は王宮を、ひいては王族を非難したと取られてもおかしくはない内容である。まだ年若いユーユでも、その言葉に同意すると言うことがどういう事態へと繋がるのか瞬時に理解出来たらしい。青褪め、そわそわと小窓を気にし始める彼女だが、走り出した馬車の中で交わされる会話など誰の耳に入ろうか。

そして、言葉では否定していても、徐々に俯くユーユの悲しみに暮れるその表情を見れば、誰でも彼女が本当のところどう思っているのかくらい想像がつくと言うものだ。

「……ユーユ、貴方はまだ若く経験も浅い。使える主人が自室から居られなくなられた事態に気づくのが遅れるなど、本来ならば有ってはならぬ大問題です。今回は奥方様の置手紙も見つかり、無事保護も終え、旦那様の寛大なご処置でお許しを頂けたとはいえ、次はないものと思いなさい」

「……は、はい」

マリアンは彼女の言葉など聞いてはいないとばかりに厳しい声音でユーユへ告げると

「此度の件を、旦那様はどうお思いでございましょう？」

くるりと首の向きを変え、続けて儂へと問うてきた。

「……ふむ、そうじゃなぁ」

マリアンとユーユの視線を感じつつ、リリィにかかるシーツを少しずらし、いつ見てもまるで濡れているかのようにつやつやと輝くその髪を梳き、額へと口づける。

「確かに、リリィは黒の一族唯一の生き残りであるが故に、子をなさねばならぬ。……まったく、医療院の連中にも困ったものだ。最初（はじめ）は、ただ衰弱したリリィの治療の為だと申しておったと言うのに、儂と婚姻を結んだとたん、今度は子を望むか……」

髪を梳いていた手のひらを、今度はリリィの頬へを滑らせる。

「旦那様、それでは奥方様があんまりにお可哀想ではございませんか……！この国の戦の為、血縁者全てを亡くされて、食べる物も住む場所も、言葉や笑顔さえ、何もかもを奪われたと言うのに……今度はいまだ存在さえしていない赤子まで奪おうと言うのですかっ！？」

マリアンは普段見せない感情的な眼（まなこ）で儂を睨み、ユーユはその隣で瞳を潤ませ、唇を噛んでいた。

「そう興奮するな、リリィが起きる」

「っ……私(わたくし)は、先ほど、怯える奥方様を拝見した際、肝が冷えました。まるで、初めてお屋敷へお越しになられたあの頃へ、奥方様の御心が戻ってしまわれたのでは、と」

そう声音を押さえ話すマリーの細い腕の先、膝へ重ねられた指先は小刻みに震えていた。

「……王宮医療院へは使いをやろう。暫く顔を出すな、と。どちらにせよ、此度の件についてリリィと
良く話し合わねばならぬしな……彼女が落ち着きを取り戻し、子について考える余裕が出てくるまで」

体調については問題ない。あの頃の様に常に医師を必要としているわけでもない。医師団が月に何度も屋敷へ訪れる必要も感じられぬ。リリィの笑顔を曇らせる奴らなど、いっそ二度と顔を出さねば良いものを！

「……どぉ、ら」

物騒なことを考えたせいか、腕に力でも籠ってしまったのか。瞳を開く様子もないリリィが愚図るように、舌足らずな言葉で無防備にも名を呼ぶもので、つい誘惑に駆られ、マリアンやユーユがいることも忘れた儂は、最愛の妻へとそっと、心からの愛を込め、口づけを落とした。

「リリィ、愛している」

だから、どうかこの先、彼女が儂から離れることのないよう……。そう、祈りながら。

五話

ぎゅうぎゅう、音にしたらそのくらいの圧を感じながら……私は目を覚ました。

「……っん」

く、苦しいっ！！誰かっ？！まるで窒息してしまうのでは？と思えるほどの息苦しさに、私は思わず身近にあるものを力いっぱい握りしめる。

「リリィ、……怖い夢でも見たのかの？」

突然、私の遥か上部から顔を覗き込んでそう聞いてきた夫の顔を見て、犯人はこいつかっ！？と確信するも。ここは自宅の寝室、つまりは夫婦のお部屋なわけで……そんなところで夫の腕に抱かれベットの上で彼の膝に座らされて眠っていたなんて……いつからこの体制でいたのか、聞きたいような、聞きたくないような。わざわざ自分を羞恥の海へダイブさせるようなそんな自殺行為は犯さないけれど、やっぱり恥ずかしいっ！！

「……どぉら、く、るし」

そして、この世界の人間は身体が大きいのもさることながら男女ともに握力も半端ないわけで……。いつまでも恥ずかしがっていると気が付いたときにはもう……みたいな事態になりかねないのでさっさと自己申告！！

「おぉ、すまんすまんっ！……大丈夫かの？」

言われた夫、ドーラは慌てて腕の力を抜き私をベットへ、そぉっと、横たえた。

一方ベットへ寝かされた私は、もぞもぞ、とぐるぐるに何十にも巻かれたシーツと格闘しやっとのことで抜け出し、ドーラと向き合う。

「だ、だいじょぶ？」

わたしはだいじょうぶ、と言ったつもりなんだんだけど、今度こそちゃんと伝わったな？

「……あぁ、儂は大丈夫じゃ。リリィは優しいのう」

いやいや、そういう意味じゃないんだけど。目の前のドーラが嬉しそうに微笑むから……まぁ良いか

「どぉら、いえ、かえる、いった」

そう言えば、ドーラ家に帰ろうって言ってたのに……寝室に籠っちゃって皆心配してるんじゃない？マリアンさんもユーユも、きっと顔を真っ青にしているに違いない！！謝らなくちゃっ！！と、そう思ってベットの上で立ち上がったのだけど……

「っ……」

「おっと！リリィ、このような不安定な場所で急に立ち上がってはいかんぞ？落ちて怪我なぞしたものなら、皆が心配する」

ふかふかのベットマットへ足を取られ、ぐらり、とバランスを崩し危なく頭から落ちる所をドーラに支えられ……。
そう、この世界で作られるベットは当たり前だけど日本人仕様ではないからもう高さが半端ない！！ベットの足が私の腰より高い位置にあるなんて、当然自分一人じゃ上り下りするのも覚束ないわけで、最近になってやっと踏み台を手に入れたんだけど、結局はドーラが抱き上げてくれるからあんまり使われていなかったりする。

「ご、めんなさい」

「かまわんよ、リリィが無事ならば。それで、どこへ行くつもりかの？」

腰を掴まれ、私はベットの上に立ち、ドーラは深く座っていると言うのに。……やっぱり物凄い身長差のせいか、首が痛くなるほど見上げ告げた。

「ん、みん、な……りりぃ、しんぱい」

今度は分かりやすい様にわざわざ小首を傾げるおまけつきだ！これなら通じたでしょ？

「……っ、リリィ、今日はもう遅い。皆には休むようにと、そう告げたばかりだからの。謝りたいのなら明日にすれば良いと、思うぞ」

おぉ、伝わった！！意味が、意味がちゃんと正しく伝わってる！！と内心大喜びした私だけど。
なぜか急に顔を赤らめて、私の腰を支えていた手のひらを自分の

自慢の白い髪に当て、忙しなく梳き始めたのを見て。私、また何か間違えたのか……？と悩む暇もなく、支えをなくした身体はベットへ座り込んだ。

「……わ、」

そして、座り込んだ拍子に巻きあがった風により、太ももまで捲れ上がったスカートの裾を引っ張り直していると……。ふわり、といつの間にか覆いかぶさってきたドーラに押され、気が付けば私はもふもふで優しいシーツへと沈み、そして……。

とかなんとか流されながら、えぇっ！？何で？！今そういう空気でしたっけ？！私帰ってきたばかりなんですけど！？　本気？！うわぁ、あぁもうっどうにでもなれっ！！……すでに裾を引っ張った意味もなかったらしいスカートは私の視線の先に打ち捨てられている。それを横目で確認し、覚悟を決め、固く目を瞑り……その後、何時も通り私の意識は羞恥に耐えきれえずフェードアウトいたしました、とさ。

六話

＊＊＊＊＊ドーラ・キルシュ・ノールブルク

静かに進む馬車の小窓、何時の間にやらそこへ映る外の風景は一の門に守られる平民達の土地を抜け、二の門を潜り貴族層が住む煌びやかな土地へ、帰ってきていたようだった。

「……マリアン、屋敷へ戻り次第リリィの身なりを整えてくれんか？儂は、王宮と王宮医療院へ宛て手紙を書かねばいかんのでな」

「はい、では御夕食はいかがいたしますか」

「あぁ、食事はいらん。少し、疲れてしもうたようじゃ……儂ももう歳かのぉ」

リリィの髪を梳き、頬を撫で、小窓の外へ視線をやりながら、儂はマリアンへ指示をだす。

「じゃがお前たちは儂等を気にせず、食事をしなさい。それから、リリィを寝室へ寝かせたら皆に休むよう言ってくれぬか……本来ならば皆を労うべきなのだろうが、それも明日にさせてもらうと」

「……承りました。しかし、どうかドーラ様も、お身体を御労わり下さいまし」

儂は何故だか、心配をかけたらしいマリアンのその言葉には目もくれず、返事を返さず、また視線流れる町並みを見つめていた。そ

うすると、いつの間にか屋敷へと到着したようで、馬車の振動も止まっていたようだ。

――どさっ、と音を立て、いつもの通り、書斎にある重厚な椅子へ腰を掛けた。

「さて、どうしたものか……。王宮へはリリィの発見とその無事について、そして儂の休暇願いを認(したた)めれば良(ょ)いが。王宮医療院へ同じ内容で済ませると言うわけにもいかん……むしろ見つかったと聞くや否や、治療を口実に明日にでも押しかけてきそうじゃなぁ」

ぎし、……我が家の当主へ代々受け継がれる樹齢幾百年の老木で作られた巨大な執務机が軋む。

「……ふむ、王宮への手紙に、医療院へ口添えを頼めばいくらかましかの？」

内容に悩みながらも、時間短縮の為決まったことから筆を動かし認(したた)め、引き出しから封筒と蜜蝋、印を取り出す。

「……うむうむ、これで良いじゃろう」

溶かした蝋を垂らし、家印を押し付ける。

卓上の隅に置かれているベルを二度ならし、音を立てず入室してきたジャオへ手紙を二通手渡す。

「すまんな、これを頼む」

「確かに、御受取りいたしました。すぐにでも馬を走らせましょう」

「それが済んだら、ジャオも休め」

そう言葉を切った儂は、部屋にジャオを残し二階にある私室へと歩調を早めた。

――――――かちゃり、ノブを回し室内へと足を踏み入れるが、室内は真っ暗で人の気配は感じられず……。

「……リリィ？」

毛の長い絨毯が敷き詰められているため、物音を立てずに部屋の奥、寝室へと進む。

……少し隙間の空いたドアを、とん、通せば視界は開かれ、寝室の奥に設えられた大型のベットの上に、ベランダから差す月の光を一心に浴びながら、彼女は眠っていた。

「ふ……まだ、眠っていたか」

そっと近づき、いつも通りメイドたちによってふかふかに纏められたクッションやシーツに埋もれ眠る愛妻を抱き上げる。

「……無事見つかり、本当に良かった。リリィ、君にこのような難しい言葉はいまだ伝わらんのだろうが、屋敷を抜け出しいなくなったと報告を受けたあの日は肝が冷えたわい。幾日も幾日も探し回り、見つからずに、まるで気が狂うかと、思ったものじゃ……。なぜ、いなくなった？……儂が、嫌になったかの？子を成すのが、怖いのか？……言葉が通じんと言うのは、可愛らしい反面、こういった際にはとんと不便だのぉ……」

儂はそのまま、ベットヘッドを背に座りこみ、ただ……心健やかに眠る彼女の身体を抱きしめた。

「……っん」

その時、リリィが辛そうに声を上げ。

「リリィ、……怖い夢でも見たのかの？」

時たま、リリィは真夜中に苦しそうに目を覚ますことがある。以前治療中にその話を伝えれば、王宮医療団の連中は、彼女が一族の者を失った時の悪夢を見ているのだろう、そう診断を下した。それゆえ、彼女が魘されるたび、儂は飛び起き安心させようと腕の中の彼女をさらに強く抱きしめるのだ。

「……どぉら、く、るし」

おっと、今日は力加減を間違えたらしい。……普段はジャオなどにも注意されるため、柔らかな果実を掴む訓練に勤しんでいるのだが、最近は忙しく忘れておったな。

「おぉ、すまんすまんっ！……大丈夫かの？」

儂は、訓練を怠っていたことを思い出し、感覚を思い出そうとまず彼女をそっとベットへ横たえた。

リリィは大きなシーツへ包まれ苦しいのか、もぞもぞとなかを動き回っている。儂は、と言えば……両手をにぎにぎ、と握り直し、このくらいで合っていただろうか？と彼女に触れて良(ょ)い握力を思い出していた。

「だ、だいじょぶ？」

すると、いつの間にかシーツから抜け出したリリィは、彼女こそ悪夢に魘されておったと言うのに、ただ両手の拳を握りしめ力加減の練習を行っておった儂の心配をし、声をかけてくれた。

「……あぁ、儂は大丈夫じゃ。リリィは優しいのう」

自分の事よりも、年老いた儂の事を心配してくれるなど、なんと

良き妻だろう。思わず、微笑んでしまうほどには、嬉しい出来事であった。

「どぉら、いえ、かえる、いった」

微笑ましい気持ちのまま、彼女を見つめていれば……リリィはいつもの様に簡単な単語を並べ、儂へ何かを伝えようとしている。……ふむ、かわゆいのぅ。

「っ……」

「おっと！リリィ、このような不安定な場所で急に立ち上がってはいかんぞ？落ちて怪我なぞしたものなら、皆が心配する」

突然彼女はそれまで座り込んでいたベットの上に立ち上がろうと腰を上げたのだが、婚姻の際に新調したふわふわのマットへ足を取られ、がくん、と膝が折れ……危なく床へ落ちるところであった。

「ご、めんなさい」

「かまわんよ、リリィが無事ならば。それで、どこへ行くつもりかの？」

儂が腰を支え、ゆっくりとその行動の先を問えば

「ん、みん、な……りりぃ、しんぱい」

彼女はメイドや執事や仲の良い使用人へ謝罪したいのだと、そう告げてきた。のだが……彼女は元々小さく可愛らしいその容姿を理解しておるのだろうか？精一杯儂の顔を見上げ、潤んだ瞳も、ナイ

トドレスの襟から覗くその柔らかそうな肌も、全てが儂へさらけ出され……。ごほんっ、儂以外の男子には決して同じことをしてはいかんと伝えておかねば！！

「……っ、リリィ、今日はもう遅い。皆には休むようにと、そう告げたばかりだからの。謝りたいのなら明日にすれば良いと、思うぞ」

……どうしたものか、彼女は先ほど帰ったばかりだと言うのに。儂と言う男は！！

良い年をして動揺を隠せぬ儂は、つい彼女を支えておった両手を離し、気が付けばトレードマークとも言える白髪交じりの髭を忙しなく梳いていた。

「……わ、」

「……っ」

そして、勢いよく座り込んだ愛妻のスカートは捲れ上がり……見えた白い太ももに、儂の年老いた理性は意味をなくした、とだけ言っておこう。

七話

ちゅちゅちゅん、ちゅちゅちゅん。

「……と、り」

この世界独特の鳥のさえずりを聞きながら目覚めた私。
ベランダから差し込む眩しい朝日に目を細め、窓際に集まる小鳥たちへあげるパンを用意しようとサイドテーブルの小さな引き出しを開けるため起き上がろうとして……腰が痛すぎて断念した。

「……い、たい」

あぁ、そうだった。家出していた期間を考えると、昨夜久しぶりにドーラから望まれ、それに答えたことになる……何週間ぶりか計算してしまうと、そりゃ、そうなるか。
せっかく、メイドさん達の協力にしてもらって、前日夕食で残り程よく固くなったパンを小鳥に上げる習慣がついてきたのに……。
広いベットの隣を見れば、そこに私の愛する夫のドーラはいない。
……人をこんな目にあわせておいて良い度胸じゃない？私が普段でも一人じゃベットから降りられないのを知っていて、こんな状態のまま置いて行くなんて酷すぎる！！

「……どぉ、ら」

「なんじゃ？」

うぉっ？！今どこから出てきたの？！
一体全体どこに隠れていたのか分からないけど、とりあえず……

なぜ半裸？下半身はタオルを巻いているけど、なんで上半身裸なの？しかも五十過ぎてるくせにその引き締まった腹筋は……昨夜を思い出して恥ずかしくなってくるからや止めて！！誰か助け……

「リリィ、目が覚めたのなら湯浴みをせんか？今湯を沸かしたところじゃ、朝からゆっくり入れば元気も出てこよう？」

いやいやいや、いくら夫婦と言っても、そんなこと恥ずかしすぎて出来ません！！結婚しといて今更とかそんなこと関係ないねっ！！奥手ランキングナンバーワンの日本人代表として断固拒否いたします！！

「……あっ」

「さぁ、湯浴みをしている間にマリアンが着替えを用意するそうじゃ」

えっ！？マリアンさんに言っちゃったの！！馬鹿馬鹿ドーラっ！！もう顔を見て話し出来ないでしょうがっ！！

そんな風にドーラへ猛烈に文句を言っても所詮心の中でだけ、口に出しても通じない以上伝わるわけもなく……。ひょいっと、その太い腕に抱き上げられてしまえば、その高さに、落とされることはないと分かっていても下を見てしまえば怖すぎて反抗できるわけもなく、強制連行です。

――――――ぴちゃん、ぴちゃん、お湯の滴る音に、視界を奪う湯気。

「気持ちが良いのぅ？」

「……」

ドーラはまだ五十をちょっと過ぎたくらいのはずなのに、額にタオルをのせて気持ちが良さそうに瞼を閉じた姿を見ると……なんだか凄く年を取っているように見えてしまう。

あぁ、悪戯気分でタオルなんてのせるんじゃなかった……。

「どぉら、あつ、い」

「ふむ、そうかの？儂はいつもと変わらんように感じるが……」

巨大ベットもそうだけど、この湯船もこちらの世界の人向けに作られているものなので言わずもがな浴槽がとてつもなく深い！！いつもはシャワーで我慢するんだけど、たまにこうして強制連行されるときは、言いたくないが浴槽に座り込んだ彼の膝に座らされているため物凄く密着しているわけです……全裸で！！あぁ恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい！！しかも羞恥で物凄く全身が熱い！！かと言ってドーラはわざとなのか天然なのか羞恥に駆られる私に全く気付いてくれないわけで……結局のぼせてマリアンさんやユーユに運び出されるわけでございます！！

「のう、リリィ？」

そっと、私のお腹に腕を回し、普段から騒がしいドーラが、まるで呼吸するように、小さな小さな声で名を呼ぶもので。

「……ど、ぉら？」

私は訝しんで、ゆっくりと彼を振り返ります。

「のう、リリィ……儂の、子を産むのは嫌じゃろうか？」

……コヲウムノハイヤジャロウカ？

儂、と言うのは、ドーラの事でしょう？じゃあ、コヲウムノハイヤジャロウカ？って何？

「……？どぉら、コヲウムノハイヤジャロウカ？なに？」

嫌に長ったらしいが、単語ではないだろうし……何度も言うようだけど、私は簡単な単語しか分かりませんよ？！

すると、ドーラはうっかりしていた。とでも言いたそうにひとしきり視線を泳がせた後……私の腹を撫でて。

「こ、じゃよ。あかご、ややこ、……他にどう伝えれば良(よ)いものかの」

いまだに濡れたタオルを乗せたままの額を掻きながら、弱ったようにドーラが小声で何かを言った。

「？……コ、ヤヤコ、アカゴ？」

一方の私は、これでもかと言うほど眉間に皺を寄せ、どうにかドーラの言葉の意味を理解しようとブツブツ考え込み……。

湯船に浸かったままどれくらい経っただろう？……その後は結局夫婦共々のぼせ上がり、ドーラの身体がデカいばかりにユーユやマリアンさんには運び出せず、朝から仕事で忙しい執事長さんや同じく朝食の支度で大忙しの大柄で有名な料理長さんにお手伝いして頂く羽目になりました！！あぁもうっ！！誰か通訳お願いします！！

八話

＊＊＊＊＊ドーラ・キルシュ・ノールブルク

ちゅちゅちゅん、ちゅちゅちゅん。

「……あぁ朝か。しかし、リリィが時間をかけて手ずから餌付けたと言うても……早朝から三拍子鳥に喧しく餌を催促されるとはのぅ」

腕の中にリリィを抱いたまま、暖かなベットの中で目を覚ました儂は窓際に集まる鳥たちに目をやりつつすやすやと眠る彼女へ目覚めのキスを落とす。

彼女の艶やかな黒く長い髪をかき分け、その瞼を見れば……やはり少し赤く腫れているようだ。

「少し、無理をさせ過ぎたかもしれんの」

起こさないように静かにベットを抜け出しはしたものの、その間ピクリとも動かず真っ白なシーツの上に静かに横たわる彼女を見つめ、思わずそう呟き。

そして恥ずかしがり屋な愛妻のため、彼女が起き出す前にその身体を拭ってしまわねば、と寝室に隣接されたバスルームへ向かい桶にぬるま湯を溜めていた数分……儂は、今回の件についてどうリリィへ伝えるべきか悩んでいた。

話さなければならぬことは呆れるほど存在すると言うのに、彼女へその全てを伝えるのはとてつもなく難しい。家を出た理由も、医療院や王宮の要求しておるリリィの子についても、……儂の想いも。

「……厄介だのぅ。人を愛するとは、こんなにも厄介で、悩ましく……愛おしいものなのか」

彼女を愛している。手放す気もない。しかし、医療院の連中は儂の歳を考慮し、数年以内に子が出来なければリリィには他の……健康で年の見合う男を宛がわせてもらう、と言ってきおった。王宮の連中は、そこまでは言わんが、それでも、彼女の一族の血を絶やすつもりはないと通告してくる始末。

まったく……誰も、儂等を放っておいてはくれんようじゃ。

「っ、おぉっと」

気が付けば、溜めていたはずの湯は溢れ、儂の着ていた寝間着まで濡らしていた。

「こりゃ、マリアンに言って着替えを出させんと」

濡れた服を脱ぎ、その辺にあったタオルを巻き、バスルームを出た。そのまま、続き扉を開けリビングルーム行くと暖炉上に置いてあったベルを鳴らす。

「お早う御座います。旦那様、何かご用でしょうか」

すると、すぐさま部屋の外。ドアの向こうからマリアンの声が聞こえ

「あぁ、寝間着を濡らしてしまっての。すまんが着替えを……」

その時、ふと思いついた。久しぶりに夫婦水入らず湯に浸かれば、リリィも何かと話し易いのではないか？うむ、そうと決まればリリ

ィの着替えも頼まんとな。

「……ドーラ様？どうかなさいましたか？」

燃えていない暖炉の前でつい、ベルをつまんだ格好のまま考え込んでしまったようじゃ。最近ぼぅっとしてしまうことが増えた気がするのぅ……やはり年のせいかの？

「……いや、どうもせんよ。今からリリィと湯に浸かろうと思うのじゃが……着替えの用意を頼めるかの？」

ちりん、と音を響かせるベルを出来るだけ静かに暖炉上へ戻し、マリアンへ用を告げた。

「はい、では先に朝食のご用意を少し遅らせるよう、料理長へ伝えて参ります」

「ふむ、そうじゃな。頼む」

「承りました」

その返答を最後にドアの前にあったマリアンの気配が遠のくのを感じ、儂はリリィが起き出す前に浴槽へ暖かい湯を溜めるため、急ぎ足でまたバスルームへと踵を返した。

――――――どぼどぼどぼっ、そう水音をたて浴槽へと見る間に溜まって行く様を眺めていると、不意に寝室の方からリリィの儂を呼ぶ声が聞こえたような気がした。

「……どぉ、ら」

「なんじゃ？」

案の定、彼女は目を覚ましておった。純白のベットの真ん中で、ぐしゃぐしゃに揉まれたシーツやクッション、羽毛布団に埋もれ、彼女の小さな身体は隠れているが……やはりその瞳は充血しておったし、儂を呼んだ声もかすれ、普段の幼いリリィでは見る事の出来ない妖艶さを引き出していた。

「リリィ、目が覚めたのなら湯浴みをせんか？今湯を沸かしたところじゃ、朝からゆっくり入れば元気も出てこよう？」

リリィのことじゃ、恥ずかしがり、きっと断りを入れてくるだろう。問いかけておいて難じゃが、返事を待つまもなく、儂はベットの端に膝をかけ彼女を抱き上げ浴室へと歩き出す。

「……あっ」

「さぁ、湯浴みをしている間にマリアンが着替えを用意するそうじゃ」

彼女は素肌にシーツを身に着けただけの状態を気にしているのか、すぐさま顔色を赤くさせ恥ずかしがり、俯いてしもうた。

……歩きながら、可愛らしく俯く彼女を見下ろせば、そのうなじには昨夜儂の付けた印が、色鮮やかに咲いているのを見つけ、思わずにやけてしまう唇を抑えきれずにふと視線をずらす。すると今度は黒髪から覗く小さなまるい耳まで朱色に染まっているではないかっ……なんとかわゆい妻じゃろう。その瞬間、儂は年甲斐もなく、今度は誰に妻自慢をしてやろうかと試案してしもうた。

――――――ぴちゃん、ぴちゃん、お湯の滴る音に、視界を奪う湯気。

「気持ちが良いのぅ？」

「……」

広い浴槽の中、儂はリリィを膝にのせ、彼女へ勧められるまま額に畳んだタオルをのせ、湯に浸かっていた。

「どぉら、あつ、い」

「ふむ、そうかの？儂はいつもと変わらんように感じるが……」

こうして膝にのせてみれば、彼女の一族は驚くほど身体が小さく、そして軽いことが良く分かると言うものじゃ。この屋敷は、彼女が来るまでそのように小さき人を招いた事もなかったもので、きっとリリィには随分暮らしにくい仕様だろうと思うのじゃが、彼女は文句の一つも言わぬ。生まれた場所も、生活も、身長も、年齢も、何もかもが違う儂等は感じ方も違う。例を挙げれば、道も儂等の歩幅で作られておるからのぅ、たった数分の距離も彼女にとっては数十分であるし、テーブルやイスは高さがあり座れぬし、この浴槽は深すぎて溺れてしまう恐れがあるため、何をするにも一人では難しい。普段はなるべく儂が抱き上げ行動を共にしておるが、傍に入れぬ時や仕事がある日などは屋敷内で働く使用人たちに助けられ、時には自力で用を済ませたりと彼女なりにこの屋敷に慣れようと試行錯誤を重ねているようだとマリアンに報告がてら聞いておる。

「のう、リリィ？」

……儂は、今でも十分幸せだと、そう思っておる。

「……ど、ぉら？」

彼女は、その小さな体で全てを受け入れてきた、強い女性じゃ。一度は家族も友人家も住む場所も何もかもを失い、笑顔も、言葉も、奪われ……それでも、新しい家族を、儂を望んでくれた。……それだけで、十分ではないか？こうして、リリィと儂、そして長い付き合いの使用人の皆と共に暮らして行ければ……それだけで。

……しかし、医療院や王宮だけの望みでない。儂も、彼女と婚姻を結んでから、願っておった想い、それがつい、湯に浸かり気が緩んだのか、ポロリと口を出た。

「のう、リリィ……儂の、子を産むのは嫌じゃろうか？」

彼女と儂の子ならば、リリィに似た女児が良い。きっと黒髪黒目の可愛らしい淑女に育つのだろう。いやいや、健やかならば男児でも構わん。儂が立派な騎士に鍛えて見せよう。

まったく……子が生まれれば、医療院や王宮側がどういった対応を見せるかもはっきりせんと言うのに、確率で言えば子を取り上げられる可能性も捨てきれぬと言うのに、儂は夢見てしまう。彼女との……彼女たちとの未来を、儂は残酷にも想像してしまうのだ。

「……？どぉら、コヲウムノハイヤジャロウカ？なに？」

あぁ、そうじゃった。……リリィはいまだ簡単な単語のほかには話せんのであったな、つい、考えすぎたようじゃなぁ。

儂は後ろめたい思いを隠せずに、子もいない彼女の腹をそっと撫で、何とか伝わらんものかと言葉を零す。

「こ、じゃよ。あかご、ややこ、……他にどう伝えれば良(ょ)いものかの」

「？……コ、ヤヤコ、アカゴ？」

無邪気にも舌足らずに、儂の言葉を繰り返す彼女を見つめながら、どうか……と願う。

どうか、神よ……一度全てを無くした彼女から、これ以上は何も取り上げてくれるな……と。

八話（後書き）

感想、お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9624y/

十月十日ＩＮ異世界

2011年12月8日02時47分発行